競技7年目の栄冠

「やっと仲間に追いついた」

《第５５回九州シニア選手権》

通算１アンダー　１４３

八丁　禎二（九州八幡、６５歳）

ホールアウト後の第一声に思いが詰まる。「感無量です。諦めちゃいかんということ。まさか優勝するとは。去年、１つ上の野上さんが勝ったし…。仲のいい野上（英司）さん、榎（隆則）さん、小杉（康之）さん、福留（洋一）さんも勝っている。やっと取れた。追いつくことができました」。余程嬉しかったのだろう。八丁の口から今大会の優勝者の名前が次々と出て来た。いずれも九州を代表するプレーヤーたち。ついにその仲間入りを果たした。

サラリーマンとして２５～２６歳くらいでゴルフを始め、１０年後にシングル、６年前の２０１９年に九州八幡のメンバーになり、本格的に競技ゴルフに参戦。以後、九州シニアでは常に上位に顔を出し、ジャパンにも毎年のように出場。そのおかげで強い選

手たちとも縁ができた。ただ、仲は良くなっても、八丁には物足りないものがあった。それが「九州一」というタイトルだった。

優勝への道は平たんではない。初日、６バーディー、２ボギー、１ダブルボギーの２アンダー７０で仲村達也（かねひで喜瀬）とともに首位タイ。最終日のアウトを終えて同組の上浦一朝（チェリー鹿児島シーサイド）が絶好調でトータル４アンダーまでスコアを伸ばした。仲村も３アンダー。対する八丁は３７で通算１アンダー。不利な状況だった。ところが、最終バックナインに入って潮目が変わる。上位の２人が優勝を意識したのだろうか。１６番ショート（１７３ヤード）で八丁が６Ｉで１オンし、左下２ｍのバーディーパットを決めると、グリーンを外した上浦がアプローチをミスしてボギー。ここで２人は並んだ。さらに、上浦は１７番ミドルでもスコアを１つ落とす。結局、上浦も仲村もインが４０と乱れ、パープレーで回った八丁に凱歌が上がった。

「今日はアプローチでしのいだ。予選から調子が上がってなかったけど、本番で調子が上がった。でも、出来過ぎ」。１０日の練習ラウンドで２アンダー、初日も同スコア、最終日が７３と安定したゴルフを展開した。今大会は２０２３年もＵＭＫＣＣで開催され、八丁は７位タイ。コースとの相性は悪くはなかった。

福岡県京都郡豊津町（現みやこ町）生まれ。北九州市小倉南区在住。現在はＪＲ関連会社の役員で毎朝、福岡市まで通勤する。午後７時に帰宅し、練習とスポーツジムにも通う。一昨年、腎臓がんを患ったが、現在は元気に回復。ウエートトレなどで以前より７ｋｇ減量しても、ドライバーの飛距離は２５０～２６０ヤードで変わらないという。

日本シニア選手権には過去４回出場。初出場の２０１９年（鳴尾）は２５オーバー１６５（８１・８４）で１０９位タイ。「鳴尾には完全に叩きのめされました」。翌年はコロナの影響で開催中止、２０２１年（土佐）は１０オーバー２２６で８位タイ。初のシードを獲得した。２０２２年（鬼ノ城）は予選落ち、２０２３年（佐賀クラシック）は２０オーバー２３６で４７位タイである。「八丁という苗字は珍しいので、よく覚えてもらえます」。５度目のジャパンはプレーで存在感を示し、２度目のシードを狙う。

【写真は㊧から２位・上浦、優勝・八丁、３位・仲村】

《UMKカントリークラブ》